

地域と大学のより高次な連携に向けて

龍谷大学社会学部

川中大輔

学生が課外で地域活動に取り組むことと、正課教育の中で学術的な学びと地域活動をつなぎ合わせていくこと、そして、地域の専門機関でインターンシップや実習に取り組むこととの間には、当然ながらその目的や目標、焦点の当てどころに

差異がある(表1)。大津エンパワねっとは、この区分で言えば「サービラーニング」に位置する。地域で生起している社会問題に実践的に関与する経験を通じて学習するサービラーニングは、プロジェクト型学習(Project Based Learning)の一つであるが、その特徴は地域との関係を重視している点にある(ファーコ 2015:268)。パー

トナーシップを特定地域で構築して、地域の人々と共に地域ニーズに向き合っていく中で、学生の市民性は涵養され、自治の担い手が育つこととなる。サービラーニングは民主主義の強化につながるものであり、コミュニティとの関係性が重視される理由はここにある。

しかし、このように学生の学習/成長のみを強調してサービラーニングを捉えれば、地域パートナー団体が関与する必然性は弱まってしまう。そこで、地域パートナー団体が実際に取り組んでいる問題解決活動に関連するプロジェクトをつくることとなる。こうした地域と大学の関係性は「交流型」と呼ばれ、国内外のサービラーニング実践では一般的なものである。それに対し、より高次な関係性として「変容型」と呼ばれるものがある(表2)。地域と大学が協働することで実現しうる価値を見出し、各主体がその遂行過程で従来からのあり方/やり方を変容させて

表1 学生の地域参加プログラムの比較

	地域活動 (Community Service)	サービラーニング (Service-Learning)	インターンシップ (Service-Based Internship)
基本的な焦点	活動	活動と学習	学習
目的	市民的成熟	学術的な学びの進展	キャリア開発
教育目標	道徳的/倫理的な発展	市民的な成熟	専門知の社会実践
カリキュラムとの統合	正課外活動/教育として 周知的に位置付け	正課教育として統合	コーオプ型教育として 協同カリキュラム運用
地域パートナーの 基本的な役割	活動への受入	地域ニーズの提示 成長や学習の機会提供	成長や学習の機会提供
サービス活動の性質	社会的な目標達成を 基礎に設計	学術的トレーニングを 基礎に設計	組織的労働や職能開発を 基礎に設計

出所: 齊藤 (2006:347) を元に筆者作成

表2 交流型の関係性/変容型の関係性

	交流型 (Transactional)	変容型 (Transformative)
関係の基礎	功利主義に基づく連携	功利主義を超えた目的に基づく関係
最終目標	連携結果に対する満足度	関係深化に対する意欲の相互増進
目的	差し迫ったニーズの充足	目先の問題解決に止まらない 大きな価値の創出
地域のパートナーが 果たす役割	マネージャー	リーダー
各組織の目標との関係	各組織の目標をそのまま受入れた上で プロジェクトを設計する	各組織の目標を検討/吟味した上で プロジェクトを設計する
境界線	各組織の守備範囲を越えずに動き、 地域パートナーのニーズを充足する	各組織の自己利益を越えて、 より大きな価値の創造を目指す
各組織のアイデンティティ	各組織のアイデンティティが 維持された範囲での関わり	コミュニティにおける大義のもと、 各組織のアイデンティティも 変容させていく
各組織のコミットメント	各組織において割かれる時間や資源が 限定されており、人的にも活動に関わる 特定の個人に限られる	潜在的には無制限な条件で 組織全体を関与させている

出所: Jacoby (2015:76) を元に筆者作成

いくような関係である。今期の大津エンパワねっとは、両地区ともこうした高次の連携を目指す試行錯誤が見られたように思われる。

それでは、どのようにすれば変容型の関係性への転換が一層進むだろうか。白波瀬達也は大阪の釜ヶ崎でコミュニティ・ソーシャルワーカーとして働きながら行ったフィールドワークの経験から、フィールドにおいて「見ようとする／聞こうとする」だけでなく、『見えること』に改めて目を凝らし、『聞こえること』にきっちり耳をすませることが現場のニーズと合致したアクチュアルな研究に結びつく」（白波瀬 2017：163）と述べている。この指摘に関係性転換の道筋の一つを見出したい。研究者も実践者も自らの関心や問題意識が明確であればあるほど、無自覚の内に視野狭窄に陥っていることが少なくない。「現場主義」の実践にあたっては、自らが何を見ようとしているのか／聞こうとしているのか（見まいとしているのか／聞かまいとしているのか）という自己の認識枠組みについてメタ的に問い返すことが不断に求められるのである。この問い返しの過程を分かち合う中で、既存の関係性や活動を揺らがす契機が見出されるのではないだろうか。学生と共に現場で「見えること／聞こえること」に心を開き、そのことで起こった自らの認識の変化を率直に語るところから始まる対話を今後も地域の方々と重ねていきたい。

最後になりましたが、今期も地域の方々や支援室の方々の温かいお支えと、学生の真摯な応答のおかげで無事に一年間の活動を終えられましたことを覚えて、深く感謝申し上げます。

参考文献

齊藤ゆか（2006）『ボランティア活動とプロダクティブ・エイジング』ミネルヴァ書房

白波瀬達也（2017）「あいりん地域における『支援』のフィールドワーク：単身高齢者の生きづらさに向き合
って」白石壮一郎・椎野若菜編『社会問題と出会う』古今書院，pp.152-164.

ファーコ，アンドリュー（2013）「サービス・ラーニング：学習資源としてのコミュニティ」OECD教育研究
革新センター編『学習の本質：研究の活用から実践へ』明石書店，pp.265-290.

Jacoby, Barbara., 2015, *Service-Learning Essentials: Questions, Answers, and Lessons Learned.*, San
Francisco: Jessey-Bass